

基調講演「パーソナリティ番組記～地域における医療と健康」

姫路独協大新学部開設記念フォーラム

姫路市と学校法人独協学園との全国初の公私協力方式で1987年に開学した姫路独協大。2016年度から文系3学部を人間社会学部等に再編し、三つ目の医学系学部として看護学部を開設した。急速に高齢化が進み、地域における医療の役割が多様化、高度化する中で、看護学部の開設を記念したフォーラム「高齢化社会と地域医療を考える」がこのほど、姫路市内で開かれ、地域医療のあるべき姿と、看護学部への期待と課題について話し合った。

地域で創る 未来の医療

朝日放送パーソナリティ 道上 洋三氏



平日朝のラジオ番組「おはようパーソナリティ道上洋三です」は今年で30年目を迎える。この番組で地域に根差した医療の話が医師に聞くことがよくある。よく書道してもらっている医師の一人が、淀川キリスト教病院の小児科医、谷均史さんだ。谷さんは大学卒業後、徳之島（鹿児島県）の病院で勤務医の経験があり、今も島に通っている。徳之島はかつて「長寿世界一」で知られた島で、千代さんが生まれ育った島だ。

30年前から島は高齢社会だったが、昔元気で、起きたきり、老人が多かった。だが近年はコンビニやスーパーがで、ファストフードが簡単に手に入るようになり、生活が変わりつつある。そこで、もう一度かつての食生活を取り戻そうと、味噌汁とピーナツ、油を削いだ豚肉を混ぜて発酵させた豚みそ（なご）を復活させる取り組みが進められている。 駅前中央病院（長野県）の鎌田貴さんにはチエルノフイリ（発酵食品）を、未来のある子どもたちを守るために現地で医療支援を続けている。最初は無名の目で見られていた

助け合いが健康長寿の鍵



基調講演に聴き入る参加者ら

が、放射能に汚染された水で作ったポトフもいとわず飲み、徐々に信頼されるようになった。最先端の医療も大切だが、医療の根本は人であり「この先生なら大丈夫」という安心感が大事だ。鎌田さんはその後、長野県をくまなく回り、働き方、食べ物、検診の大切さを説き回って、長野県を「長寿日本一県」に押し上げた。 和歌山県の南部川村（現みなべ町）は、1990年代に多く持ちかけられたリゾート

開発の話を通り、特産の梅畑づくりにこだわった。ゴルフ場購入の資金を検診車購入に充て、医療費が半分になった。梅産業が発展し、村民所得の伸び率日本一を続けた。地域に合った特産品、食生活があり、地域の人たちが連携しあつてこそ地域の未来がある。 これは自助、公助、共助が求められる災害復興と一緒だ。一番足りないのは共助で、家族、近所、地域がどれだけ協力できるかが健康長寿につながる。 比較山延層寺（遊覧車）の千日回廊は最後に9日間の断食を行う。最後は幻惑が起きるといふ。人間いよいよ死ぬというときになると、五感をフルに使って生きようとするというのだ。日常で五感を研ぎ澄ませるには、朝起きながらラジオで聞いたことをメモし、人に話すといいたい。ぜひラジオで実践してほしい。

寺野氏 医療従事者不足が深刻 本多氏 将来見越した教育必要

パネルディスカッション

- 【パネリスト】 道上 洋三氏（朝日放送パーソナリティ） 寺野 彰氏（学校法人独協学園理事長） 本多 義昭氏（姫路独協大学長） 森田 せつ子氏（姫路独協大看護学部長） 北村 嘉章氏（姫路市医師会副会長） 【コーディネーター】 道谷 卓氏（姫路独協大副学長）

道谷 超高齢社会を迎え、医療費の高騰、医師不足、地域間の医療格差などが問題になっている。地域医療の置かれている現状と課題を踏まえ、今後の地域医療のあり方を考えたい。まずは自己紹介を兼ねて一言ずつお話を。 北村 姫路市内で在宅医療に取り組んでいる。地域の医療では地域包括ケアシステムが重要だ。これは皆さんが住み慣れた地域で自分らしく人生の最後まで暮らせることを目指す仕組みで、平たく言うと昔の「ご近所さんで困りごとを相談しましょう」ということだ。高齢多死社会を迎え、どのように死を迎えるかについても考えてい

かなければならない。 森田 4月から74人の学生を迎え看護学部がスタートした。現在、看護系大学の設置が急速に進み、本年度は全国で254校となった。全大学のうち3校に1校を占めている。増加の背景には、患者主体の医療への質的な転換、生活を主眼に置きながら支援していく「直して支える医療」への進展、そして何より看護師不足がある。医療の進化に対応できる質の高い看護が求められる。 寺野 地域医療が崩壊しつつある。原因は低成長社会で医療費が十分出だせなくなったことと、医師、看護師など医療従事者の不足にある。地方になるほ

ど深刻だ。そのような状況の中で、大学が果たす役割について考えているところだ。 本多 大学は地域の課題に対処できる人材を育てることが使命だ。卒業生が社会に出て中核として活躍するまでに時間がかかる。だからこそ、将来を見越してカリキュラムを作っていく必要がある。今回の看護学部の

開設も地域医療への貢献を考えてのことだ。 道上 熊本震災で支援に入った医師に話を聞くと、患者に関する情報が医師の間で共有されていないことが課題だという。専門分化が進み、一人の患者を全体でとらえることが難しくなっている。中心にナースセンターを設けるなどして、被災者の情報を共有化できるようにしてはどうか。 寺野 道上さんの指摘はもっともだ。いろいろな訴えを持って一人の患者を、総合的に診断しないとけ

ない。専門性を突き詰めると大きな見方ができないし、薄く広く診るといのは若い医師はやりたがらない。大きな問題だ。 北村 在宅医療のネットワークづくりの中で、複数の医師が連携を取って、あたかも総合診療ができるような仕組みをつくるのが、真に地域包括ケアのあり方だ。 道谷 地域医療が抱える課題にどのように取り組んでいるのか。 北村 在宅医療では医師、看護師、薬剤師、理学療法士、栄養指導、ヘルパー、ケアマネジ



北村嘉章氏



森田せつ子氏



道谷卓氏

北村氏 職種の垣根越え連携を 森田氏 地域に学ぶ看護の教育

ヤーらの連携が重要だが、十分とはいえないのが現状だ。姫路医師会と姫路市は2年前から医療従事者21団体の連携会議をスタートさせ、垣根を取り払おうと取り組んでいる。訪問診療ができる医師を増やし、市民に在宅医療への理解を促すことも重要だ。 森田 地域に開かれた学部づくりを目指しており、本年度は地域の人々との「共生」をテーマに掲げている。健康で幸せな生活を送

っていくための公開講座や、健康相談に乗る地域コミュニティサロンの開設、市民参加による模擬患者参加型演習を計画している。地域の力を借りて看護教育を考えていきたい。 道谷 最後にまとめを。 寺野 現在栃木県でCCRC（継続的ケアのある引退社会）に取り組もうとしている。病院を真ん中に置いて、周辺に高齢者が居住し、健康管理をしながら温泉やゴルフなどを楽しめる居住区だ。姫路でも実行できたら面白い。 本多 地域包括ケアシステムを整えていくには、地元精通し、信頼を得られる人材が必要だ。地元に戻りたい、地元で頑張りたいという人があれば、ぜひ本学の看護学部を目指してほしい。 森田 看護学部はまだ産声をあげたばかりだが、地域の健康づくりに貢献したい。

道上氏 医師間の情報共有課題



寺野彰氏



本多義昭氏



道上洋三氏